

*****第二章【承】*****

ルールはつくったもん勝ち。自分のつくったルールの中では神になれます。途中でみんなにルールが分かってアドバンテージが取れなくなったら、またアナザーワールドをつくるんです

——堀江貴文

道は無限にある

——松下幸之助



ボウディツカに案内された先は洞窟だった。

「ここは禁足地でね。本来余所者を入れていいところではない。他言は避けるよ」

それは完全な天然洞窟ではなく、人の手も入った地下施設らしい。薄暗く苔生し、冷たい風が吹く道ではあったが、ところどころに松明が用意されている。

その道が延々と続く。

護衛のチーシュイはアルIIイクシルの周囲に常に気を配っているし、今ここにいるのはそこにボウディツカを入れた計三名のみだが……。

——伏兵がいたら、まず対処できないな。

一応、女王には話を通してあるが、それがどこまで役に立つかはわからない。

「そうビクビクするなって。ほら、あれだ」

ボウディツカは苦笑いをしながら、前方を指差した。

そこには岩盤に掘られた女神の絵があった。極度に抽象化されているために、その意図はつかみにくい。が、両手あるいは後光か双翼を広げた女神に見える。あるいはこれこそが本物の《アンドラスト》なのかもしれない。

——なるほど……これ故に神域なのか。

ところがボウディツカはいきなりその女神を蹴り倒した。

「え？」

とアルIIイクシルが戸惑うと、その向こうにも通路があった。どうやら、その女神で隠しておいた秘密の抜け道らしい。

そこをさらに進む。

すると洞窟の壁に篝火の光が奇妙な反射を見せ始めた。目を凝らすとそれは……。

金銀財宝——という奴だった。

「凄……たしかにこの島は貴金属も出土すると聞いていたけど……」

だからといって只の洞窟にこんなものが転がっているはずがない。注意深く観察すると、

財宝だけでなく実用品らしい武器、そして、水や食料も集められている。それも保存性の高いものばかりだ。

「どうやら秘密の倉庫——ある種のセーフハウスの役割を兼ねているらしい。何らかの事情で危機に陥っても、ここに逃げ込めば、再起を図れるというわけだ。」

だがボウディツカはそれらには目もくれずにさらに先に進む。

石造りの扉があった。ボウディツカは腰の鍵を取り出す。

扉を開けると照明があった。それも大量の酸素を消費する篝火による照明ではない。精霊結晶が壁に張り付けてあり、部屋全体が光を放っているのだ。

「……ティルⅡナⅡノグにも精霊を結晶化する技術があったのですか？」

「照明用に調整するぐらいが精一杯の未熟な技術だよ。アツザフルのように自在に加工するには程遠い。あなたの神御衣カムミツのように繊維状に精製するなど夢のまた夢だ」

「そりやそうだ——とアルⅡイクシルは思った。神御衣カムミツを安定生成する技術はアツザフル帝国でもウルルぐらいしか持っていない。第一、帝国や夏国の外では精霊結晶の人工生産そのものが珍しい。不安定な天然の産出に頼るか、あるいはかつての『巫女』たちの遺産に継るかというのが普通だ。まかりなりにも人工精霊結晶を照明に応用している分、ティルⅡナⅡノグ——というよりも、このボウディツカは先進的なのだろう。」

「ま、見て欲しいのはこんな稚拙な精霊結晶ではない」

「いや、この制限的な環境で精霊を結晶化した手法は興味深いのですが……」

「それはあたらしが知っていればいいことだ」と、ボウディツカは不遜な態度を崩さない。

「あんたが見るべきはその足元だ」

言われて、アルⅡイクシルは視線を下げる。

そこには書籍や図籍が山になっていた。なるほど、これを読むための照明らしい。

そして、探検士ウラヤマの常でアルⅡイクシルも活字中毒である。思わず、足早に近づき、手に取り、目を通す。

「……え、そんな……」

それはティルⅡナⅡノグの人口、地理、法令、産業——等々の記述の山だった。それもちかなり精密に作られている。

「凄い。この島のここまで詳細な記録が……」

「こういった体系的調査はティルⅡナⅡノグではまだ行われていないはずだ。それこそ、アルⅡイクシルの任務にはこういった調査のための視察も含まれているのだ。」

「あたしが極秘で作らせた」

「君がつ？ これを？ いや——そもそも……これは僕が見てもいいものなのですか？」

「好ましくはない。だが、あった方が便利だろ？」

「そりや、当然ですよ」

「だが！」とボウデイツカは綺麗な正則語フスハで声を荒げた。「わかっていると思うが、ここにある書籍図籍を持ち出すことはまかりならぬ！ 持ち出しはすべて貴様の脳裏に留めておけ！ もし、このこの情報の情報が一片でも外に漏れてみる……」

「わかりました。正直、いささか不便ではありますが……」

もし、アルルクシルが近代日本人なら『シーボルト事件』という言葉が頭を過ぎっただろう。いずれにせよ、探求士ウラマとは博物学者であり、哲学者である。自然科学者としてのアルルクシルには、当然、素朴な欲望が芽生えたが、社会学者としてのアルルクシルがそれを抑制した。

「これらの資料が軍事上どれほどの価値を持つかは推察できません。特にテイルナノグのように……」

そこまで言いかけて、アルルクシルは口籠った。だが、ボウデイツカは冷笑気味にその後を続ける。

「……特にテイルナノグのように正面戦力が極めて乏しく、有事において非対称戦しか活路がない場合、『地の利』は不可欠なものだからな」

そして、ボウデイツカはアルルクシルに鍵を投げ渡した。

「その点に気をつけてもらえれば、後は自由に使っている……この島のため、役立ててくれ」

最後の一文に力を込め、彼女は颯爽と背を向ける。

立ち去るボウデイツカの後姿に、アルルクシルは見とれていた。

繰り返になるが、大器なのだろう。あの若さで一党を成しているだけのことはある。ぶつちやけた話、かっこいい……。いやいや、これは……。

「惚れるなよ」と今まで黙っていたチーシュイがいきなり釘を指した。

「べ、別にそんなじゃないよ」

「どうだか……お前は賢しらな女に弱いからな」

何故かチーシュイは不機嫌だった。

「とにかく俺は認めんからな。お前があ程度の小娘に臣従を誓うなど」

「わ、わかっているよ。彼女は辺境にしては優れた知性の持ち主だが、結局は『辺境にしては』の水準だ。せいぜい第四階梯アルリスファル《黄》の資質さ。第五階梯アルアクフダル《緑》にすら届かない小物だよ。ああ、そうだ。間違いないね」

口にしてから、僕は何を言っているのだろうか——とアルルクシルはへこんだ。知的能力は運動能力のように定量比較できるものではない。第一、彼女が第五階アルアクフダル《緑》にすら届かない小物だというのなら、第二階梯アルリアマル《赤》にすら程遠い自分は何なのだ？

だが、チーシュイはその言葉に「ならば、いい」と奇妙な納得をしたようだった。挙句、まったく予想もしていなかった質問をしてくる。

「ところで、あの小娘、書籍図籍は駄目と言っていたが、その前の金銀財宝はいいのか？」
「——モノの価値がわかっているということだろう」

アルルクシルは『君のような体力馬鹿とは違う』という言葉を飲み込んだ。

プラスは洞窟から出てきたボウディッカの姿に安堵した。

その姿はいつものボウディッカだった。目立った傷も——ついでにいえば、返り血の類もない。どうやら、穏やかに事態は推移したらしい。

最初に『ボウディッカが倒された』という話を聞いた時、プラスはその信憑性を疑った。あのボウディッカ姉さまが負けるはずないと思ったからだ。だが、複数の信頼できる証言が手に入り、どうも動かぬ事実らしいと認めざるをえなくなった時、プラスの心を支配したのは恐怖だった。

もし姉さまが怪我でもしていたら——と気が気ではなかったのだ。

ところが、そんなボウディッカの第一声は

「おい、プラス」

だった。こういう風に呼び付けられる時は、決まって面倒事を任せられる。

「おまえ、あいつが持ってきた本を全部書き写せ。あいつが帰る前にだ」

「えーっ！」

プラスは悲鳴を上げた。何しろアルルクシルの持ってきた本はそれこそ荷車一杯にも及ぶのだ。

「……じ、時間がないよ。それに彼にばれたら……」

「許可は貰ったろ？」

この言葉にプラスは少し悩んだ。だが、しばらくして、該当するアルルクシルの発言を思い出す。

——「……なるほど、これらの書を後で貸していただけますか？」

「……あれって、そういう意味だったの？」

プラスには詐欺っぽい手法に思えた。

「時間もそこそこある。思い出せ、あたしが製鉄について尋ねた時、あいつはどうした？」

「えーと……急に生き生きと語りだしたね」

「そうだ。自分の好きな話題になると途端に饒舌になる。周りが見えなくなる。あの調子だと、あたしが製鉄にまったく興味がなくなるとも一方的に喋り続けていたに違いない」

「学者肌って事？」

「違う。オタク野郎ということだ」

その二つの違いがプラスにはわからない。しかし、ポウディッカは言葉を重ねる。

「そして、どーしよーもないオタク野郎だから、あの『知識の檻』からは出てこれんさ」

「意味がわかんないよ」

プラスは嘆いたが、無論、それを気に留めるポウディッカではない。

「煩い。つべこべ言わずにさっさとやれ」

「………：………：いっそ、あの本の山、買い取れば？」

「そのつもりではある。しかし、断られるかもしれない」

「貴重な書物とはいえ、帝国に行けば同じものは手に入るでしょ。金さえ積みめば、彼に断る理由はないと思うけどな」

「だが、オタク野郎だぜ。自分の本を他人に渡すとなりや、ただだけふっかけらるか、わかったもんじゃねえ」

「………：珍しいね。姉様がこの手のものには金を惜しむなんて」

プラスは皮肉ではなくそう思った。あの洞窟の中にある資料については、プラスも知っている。というか、プラス自身協力させられたのだ。それだけにポウディッカが情報を重んじ、そのために労力や資金を惜しまないことを知っている。

「理由は他にもある。………：プラス、そうだな、あの『鉄史要諦』の中にある技術で今のこの島に最も必要なモノを言ってみろ」

「え………：プラスは口箆った。「そ、そもそも『鉄史要諦』があの本の山のどこにあるのかも………」

「わからんだろう。だが、あの男は違う。見たろ。あの手垢の跡、汚いたら、ありやしねえ」

「あ………：」プラスはポウディッカの諷意を解した。「あれは熟読の証。彼の頭には本の内容が入っているんだ。丸暗記はしていないだろうけれど、必要な時に必要な所を、すぐに抽出できる」

「そうだ。あれだけの本を使いこなせるくらいに熟読しているってことだよ。知識が体系化されている。あたしが欲しいのは、あの本の山だけじゃねえ、それを使いこなせる若い腹心だ」

「………：わかった」

プラスは覚悟した。必要な労力は莫大だ。が、それだけやれば、アルIIイクシル以上にあれだけの本を使いこなせるだろう。それでこの姉の腹心として認められるなら、十分だ。

「いい顔だ。そうだな。これをやり遂げたら、お前の願いを一つ聞いてやろう」

ポウディッカはプラスを捕食者の目で見つめ、少年はその視線に心を振るわせた。

ボウディッカの予言は見事に的中した。

何しろ、アルルクシルはその洞窟から離れなくなったからだ。睡眠も食事も、洞窟の中で済まし、排泄の時のみ、洞窟の外に出るといふ生活になったからだ。かなり離れた邑内に置いてきた書籍の事を、一時とはいえ忘れてしまっていた。

何といっても、邑内に置いてきた書籍は既に読破している。内容は頭の中にある上、プラスの指摘通り帝国に戻れば同じものは手に入る。

だが、この洞窟の中にある資料は未読のものばかりだ。特にアツザフル人であるアルルクシルにとっては、その内容も悉く未知なのだ。

そして、アルルクシルはボウディッカの言う通り、オタク野郎だった。ここにある本を読み終わるまで『知識の檻』から出ることは出来ない。

いや、未読や未知ということを除いても、ここにある資料は興味深かった。

中には行政改革の提言書まであった。執筆者の名は『ボウディッカ』。そして、その身は……。

「て、天才だ……！」

と一読して、唸らざるをえないものだった。事実、この後のアルルクシルの行動は、ここにあつた提言書に基づいたものが多い。それ程に彼女の発想は合理的で効率的だった。「……」

浮かび上がる疑念に、思わず、アルルクシルは手を止めてしまう。

——そもそも彼女は何者なんだろう？

無論、ここにある資料はあくまでも『辺境にしては精密』という水準である。帝国国内ならば、既に完了している調査ばかりだ。また提言書の内容も、明らかに帝国行政を参考にしたものだ。

——つまり、彼女は帝国文明を理解し、応用するだけの知性と器量を兼ね備えている。

風貌からは武闘派に見えるが、実際には文武両道なのだろう。率直に言って、アルルクシルにここまでの劣等感を抱かせた娘は、彼女で二人目である。

だが、そうになると、尚さら、彼女の行動がわからなくなってくる。

そも彼女はアツザフル語を自在に操るのだ。提言書からも辺境の後進性に苛立ち、帝国の先進性に倣いたいという気配が漂っている。文化派遣団を歓迎する側の人間であってもおかしくない。なのに、何故、自分に突っかかってきたのだろうか？

——いや、結果的には歓迎されているか……。

明るい照明の下、重要機密に囲まれている現状にアルルクシルは首を捻った。

「このようなことは『知識の檻』を出た後も何度もあった。」

ティルⅡナⅡノグの原始的な製鉄所を近代化しようとした時の事だ。

アルⅡイクシルはまずそこで働く職人たちの仕事を視察した。そして、脳裏にある《鉄史要諦》の内容と照らし合わせ、そこで行われている作業手順を頭の中で纏める。

銑鉄と鑄鉄が共に炉に入れられる光景が目映った。鑄鉄の熔融度は鍊鉄よりも三百度以上も低い。そのため、鑄鉄は先に溶けて、その炭素分が鍊鉄に滲み込む。結果、銑鉄と鑄鉄の中間の炭素含有率の鉄——すなわち『鋼』となる。

いわゆる滲炭法を用いているらしい。炒鋼法などに比べれば、鋼の生産効率は落ちるものの、硬鋼と同時に軟鋼が得られるなど、これはこれで利点もある。

とどのつまり、わかったことは

——技術水準自体は侮れない。

ということだった。たしかに帝国の最先端技術には及ばない。だが、三流探求士のアルⅡイクシルが口を挟んでも、今以上のものは作れないだろう。

——しかし、やたらと親方連中が若手を殴っているのが気になる。

すぐに手が出る荒っぽさは、ボウディッカにも見られる辺境の気風といえる。だが、こんなに頻繁に暴行を加えられているのは作業に支障が出るのではないか？

思い切ってアルⅡイクシルが尋ねると、親方は憮然として答えた。

「こういうのは身体で覚えるしかないんですよ」

「身体で……ですか？」

「ええ、物覚えが悪い奴は痛い思いをする。それでこそ、必死になるんですよ」

一理あるな———と思った。だが、昔から『物覚えが悪い奴』だったアルⅡイクシルは食いつ下がった。「とはいえ、もう少し親切に教えてもよいのでは？」

「勘弁して下さいよ。こっちだって、自分の仕事がある。そこまで親切に若手の面倒を見てもらえませんぜ」

親方は遠回しに、早く自分の仕事に戻りたいと言っていた。実際、女王のお墨付きがなければ、アルⅡイクシルに付き合ってもくれなかっただろう。

「なるほど、もっともです」

そして、頭を下げ、その日のアルⅡイクシルは立ち去った。

数日後、製鉄所に再び現れたアルⅡイクシルは若手に自作の手順書を渡していた。

滲炭法の基本的な概念と、そのための作業手順を纏めたものだ。

チーシューイに挿絵を付けてもらったから、文字を読めない者にも理解できる。数冊を製本しておいたから、まだ作業を熟知していない若手に回し読みさせるという考えである。

予想通り、若手連中は食い入るように、手順書を見入っていた。

アルⅡイクシルには自信があった。いかにこの若手が『物覚えが悪い奴』であっても、アルⅡイクシル程ではないはずだ。自慢ではないが、アルⅡイクシルは三十過ぎで白衣——覚えの悪さでは他の追隨を許さない。

そんなアルⅡイクシルが自分にもわかるようにと書いた手順書である。将来有望な若者が理解できぬはずがない。

実際、若手の中からは「これを写本してもいいですか？」という声が上がった。無論、そうしてもらえれば、ありがたい。アルⅡイクシル自身の任務である『先進技術の伝達』を果たす一助となる。

これで皆が幸せになれる——アルⅡイクシルはそう考え、快諾した。

ところが親方が抗議に来た。

その時、親方の言っている事の意味がよくわからなかった。仁義に欠けるとか筋が通らないとか、法に反する（これについては「どこに明文化されているのですか？」と尋ねると黙り込む）と要領を得ない。

要約すると『手順書を若手に渡すな』ということだろうか？

「……先日『こっちだって、自分の仕事がある。そこまで親切に若手の面倒を見てもらえません』と仰ったではないですか。これでその問題は解決です。今後は紙の上で予習ができるのですから」

「だが、こんな紙切れですべてを割り切れるほど製鉄は容易くない！」

「無論です」アルⅡイクシルは肯^{がえん}ずる。「故にその割り切れない部分をあなた方に教えていただきたいのです。これにより教える側、教えられる側、双方が労力を削減できます」

先日の親方の言葉は今でも正論だと思う。実際、アルⅡイクシルもチーシューイに文字を教える時、苛々したものだ。声を荒げてしまったことも一度や二度ではない。自分にとっては当たり前のことを一々説明せねばならない——それが教える側にとってどれだけの負担になるかは、アルⅡイクシルも身に沁みている。

故にこそ、親方の心痛を軽減しようとしたのだ。

ところが、親方の態度は軽蔑そのものだった。

「何故、そうも楽をしようとするのだ」

正直、この言葉にアルⅡイクシルは過剰に反応してしまったと思う。一瞬、投石器の事が思い出される。

「楽をしようとする事の何がいけないのですか？」

「苦労した事程、よく覚える。当然のことではないか」

「それは迷信です」

アルルクシルは口に出してから——ああ、これでこの人との関係は極めて悪化したな——と悔やみつつ、言葉を重ねた。

「数をこなした事程、よく覚える。それが事実です」

何しろ、これは実験で立証されていた。問題と解法を予め示し、それを機械的に反復させる教育法と、問題だけを与え解法は隠し、それを自発的に創造させる教育法の比較検証はしばしば行われ——常に機械的な教育は、自発的な教育よりも高い効果を示す。

「……あなたは我々が十年苦しんで悟り、初めて教わったことを、新人連中には最初的一年で教えてやれと——そう仰るのか？」

「当然でしょう。それが進歩です。そうでなくては人は一歩も前に進めません」

例えば、人類が天動説の矛盾を地動説で解決するまでには千年かかった。では、天文学の講義において、地動説を教える前に、千年も天動説を教え込むのか？ 馬鹿馬鹿しい。その前にヒトの寿命は尽きる。それでは永遠に地動説に辿り着けない。

アルルクシルは朗々と語った。が、親方はきよんとした顔をしたただけだ。

昔、父親に『お前の言葉は玄学ではなく術学だ』と言われた嫌な記憶が甦る。

——もつと噛み砕いた言い方をすべきだな。

そう考え、アルルクシルは別の例えを用いた。

「苦労した程、よく覚えられるというのなら、あなたのアツザフル語は何故そうも稚拙なのですか？」

この侮辱には彼も黙ってはいなかった。

「母語ではないのだ。稚拙なのは仕方あるまい！ いや、ここまで覚えるのにもどれだけ苦労をしたか！」

「つまり、いくら苦労しても無駄なものは無駄ということですよ」

あえて冷徹に言っていると彼は口籠る。

「逆もまた然りですよ。僕のテイルナノグ語はあなたよりはるかに稚拙ですが、それは僕が苦労をしていないというわけではない」

「……それは認めるが……」

「要はどれだけ反復練習を行ったかで決まるのです。僕のアツザフル語があなたよりも巧みなのは、僕がアツザフルで生まれたから、自然と膨大な反復練習を行えたからです。あなたのテイルナノグ語が僕より巧みなのは、あなたがテイルナノグで生まれたから、自然と膨大な反復練習を行えたからです。それ以外の要素はありません。苦労したか否かは結果に影響しない」

「……知識は詰め込むに限ると？」

「はい。若者には常に近道を教えねばなりません。試行錯誤の経験を積ませることも時に

は必要ですが、そこに時間をとられていては、僕のテイルⅡナⅡノীগ語やあなたのアツザフル語のように稚拙なままに終わってしまう」

「我々の苦しさなど一顧だにしないというのか」

こいつは何を言っているんだ？——とアルⅡイクシルは懺然とした。

「自分が苦しかったのなら、後に続く者には、その苦しさを味合わせまいとするのが、大人というものでしょう」

「だが、そうやって、近道ばかり教えていては忍耐が身につかん」

「別に穴掘り等の単純作業をやらせる事を非難しているのではありませんよ。むしろ、若いうちにはそういった事に時間を費やすべきかもしれません。そのためにも、手順を予め纏めておき、教授の時間を減らし、鍛錬の時間を増やすべきでしょう。そうすれば、忍耐も実力も並列して身につきます」

アルⅡイクシルは殴られたからといって製鉄が上手くなる訳がないと言外に仄めかした。

「我々は必死になって覚えてきたのだぞ！」

「だから、その既得権益を守れと？」

最後の一言は突然現れた赤毛娘のものだった。

「ぼ、ボウデイツカ様……」

その名を呟いて萎縮する親方とは対照的にボウデイツカは権高だった。

「いっそ、実験してみるか？ 賢者様のやり方とあんたらのやり方のどちらが上か？」

「馬鹿な。……私がこんな若造に劣るとでも？」

アルⅡイクシルは驚いた。まさか三十過ぎて若造扱いされるとは……。

十六のボウデイツカには尚の事だったのだろう。露骨に嘲笑しながら、言葉を繋げた。

「思っちゃいないさ。この賢者様も製鉄は専門ではない。経験もあんたに比べれば圧倒的に乏しい。ただな、その手順書を見ればわかると思うが、こいつには経験はなくても知識がある。もし、本当に実験することになれば、この賢者様は今欠けているその経験すら手に入れるんだぜ」

一度や二度の実験ならアルⅡイクシルが勝る可能性は絶無だ。だが、そうやって、経験を重ねればどうなる？ アルⅡイクシルにはそれこそ帝国の最新技術についての知識すらあるのだ。無論、知識しかないのだから、一度や二度ではその最新技術も机上の空論に終わるだろう。だが、三度目や四度目ならどうだ？ 知識はあるのだから、解法そのものは（何しろ同じ手法で既に帝国では大量生産が行われているのだから）正しいのだ。それこそ、試行錯誤を繰り返せば必ず……。

「必ず帝国の——世界でも最先端の工業技術に到達する。その時、それでも自分の方が上だと言えるのか？ この島から一步も出たことない自分たちの工芸技術が上だと言えるの

か？……価値判断は予め伝えておどうぞ——あたしは一の名作よりも百の秀作を上とする」
ボウディツカは脅すような口調だった。いや、実際、親方は怯えた顔になってきた。
見ていられないアル||イクシルはそこで口を挟む。

「あの、それは時間の無駄ですよ」

二人の視線がアル||イクシルへと向かった。

「それなら、最初から僕の知識を親方の経験に活かしてもらった方が早いです」

その言葉に二人とも沈黙する。そして、先にその沈黙を破ったのは親方だった。

「わかった。私の負けだ。意固地になっていた」

「いえ、僕の方こそ、生意気を言ってすいません」

親方の謝罪に、すかさずアル||イクシルは返礼した。

穏やか気配が流れる。これで手打ちだ——という思いは大人二人に共通するものだった。

だが、若いボウディツカにはそんな取り繕いが気に入らなかったらしい。彼女は舌打ちをして、さらに親方へ凄む。

「……この賢者様を舐めるなよ。お前も聞いているだろう。あたしとの決闘を」

親方の顔色が再び変わった。

——どんな風に聞いているんだろう……？

あらぬ尾ひれが気になるアル||イクシルであったが、ボウディツカはつらつらと語る

「このあたしとの『一時間にも及ぶ激闘』——そう聞いているのなら、それは誤りだ。決着までに一時間かかったのは事実だが、あれは『激闘』などというものではない」

——おお、意外と正確に……。

「あたしは弄ばれていたに過ぎない」

——伝えていないっ……！

「一時間も猶予を与えられながら、あたしは一太刀たりとも浴びせることは叶わなかった。
このあたしの腕をもってしても、この賢者様にはかすり傷一つ負わせることができなかったんだ」

……訂正せねば、誤謬は正さねば——と焦るアル||イクシルであったが、嘘を言っていないのは事実である。

「そして、この賢者様の繰り出す一撃で……わかるか？ たった一撃で、あたしは綺麗に意識を絶たれた。ああ、まさに完敗だったよ」

ぶるぶると震えだした親方は最早言葉を返せなかった。

「じゃ、次行くぞ」

「え？」

「いいから、こい」

ボウディツカはそう言ってさっさと歩いていく。アル||イクシルは迷ったものの、この

まま自分が親方の傍にいるのは親方にとって辛いだろう（そして、そんなことを考えることとそのものが親方への侮辱なのだ）と思ったので、その後をについていった。

とりあえず、はつきりしたのはボウディッカの名を出せば、大概の無茶も通るというだ。しかも、それをボウディッカ自身が許している節すらある。つまり、ボウディッカの名前なり何なりを使って、ティルⅡナⅡノグの近代化をやれ——という事なのだろう。だから、アルⅡイクシルは歩きながら思い切って尋ねてみた。

「あの……もしかして、この前はわざと僕に負けたのでは？」

ボウディッカは怪訝な声音で聞き返す。「理由は？」

「辺境は尚武の気風が強い。あの親方ほどでないにせよ、頭でっかちは軽んじられる。ところが、僕はその頭でっかちです。仮に僕が帝国流の手法を導入するように求めても、軟弱者の意見と一蹴されるかもしれない」

「……だから、あたしが負けることによって、あんたに華を持たせ、仕事をし易い様にしたってか？」

「僕が巫術を使う前に仕留めることもできたはずですよ」

ボウディッカは少し考え込む仕草を見せた後、「……本気でなかったというのは、半ば当たりかもしれない」と慎重な返答をした。

「あんたの——帝国の技術がいかほど確かめたかった——その探りが迷いになり、動きを鈍らせた可能性はある。神聖なる決闘を汚したという点では謝罪しよう」

「……いえ、あれは動物実験ですから」

ボウディッカは肩をすくめた。「あたしや、あんたと違って、年齢的に後があるからね。負けて学ぶも良しと思っていた」

やっぱり大器だ——とアルⅡイクシルは感動すら覚えた。

と、思ったなら、急にボウディッカは立ち止まった。

そして、いきなり首だけ振り返って尋ねる。

「しかし、今のが本音なんだな？」

「へ？」

「いや、いい」

そう言って、彼女は再び勝手に歩き始めた。

翌日。

アルⅡイクシルが参考資料にするため、チーシュイと共に私書を積んだ荷車に向かっていくと、その道中で少女のような少年に出くわした。

「ああ、プラス君だったね。写本はどの程度進んだ？」

そう声をかけてやると少年は面白いほどに狼狽した。

「ど、どうして？」

「本の並べ方には性格が出る。僕は同じ筆者ならその執筆順に並べているが、君は同じ筆者ならその系統順に並べている。一目瞭然だよ」

「ああ……」

プラスは頭を抱えた。自分のうかつさに気付いたようだ。

同時にアルルクシルはこの少年に同情した。あれだけの本を書き写すのは一苦勞であるという事もある。だが、それ以上に、今まで本に囲まれた経験がないであろうプラスに同情したのだ。大量の書籍を整理した経験があれば、あんな失態はまず見せまい。要するにこんな田舎では書籍の流通量が少ないのだ。そしてそれは読みたい本を読めない事を意味する。

「……写本も『ボウディツカ姉さま』の指示かい？」

「そうです……あ、いえ、僕の独断です。すいません」

そう言って、プラスは頭を下げる。どうも嘘がつけな性質らしい。

——この子、かわいいいなー。

アルルクシルの頬が緩む（逆にチーシュイは不快な顔をした）。

「プラス君、今から僕は荷車の私書をまとめて『知識の檻』に持っていく。僕自身の寝泊りも今後は『知識の檻』で済ますつもりだ。設備もある程度整っているし、資料が身近にあれば効率的だからね。しかし、そうなる君が僕に隠れて写本をするのは難しくなる。この際、堂々と僕の許可をもらって写本をした方が、一々隠れる手間が省けて、やはり効率的だとは思わないかね？」

柔らかい口調でアルルクシルはさらに説く。

「テイルルクシルノグにはまるで無知な僕にしても、君のような知恵袋が身近にいてくれると心強い。つい先日も親方と揉めてしまった。しかし、君の助言があれば、もつと穏やかに事を進めることもできたかもしれない」

「……あれは先代の親方が偉大過ぎたんですよ」

そして、今の親方はボウディツカ曰く『師匠の偉大さを知らぬ弟子』だという。

これはがむしゃらに頑張っただけで成功した人間を示すらしい。つまり、がむしゃらに頑張っただけで成功する構造を造ってくれる師匠に恵まれた弟子だ。距離も方位も道程もすべて教えてくれる師匠の後ろにくっついて目的地に辿り着いた弟子だ。それで成功したのなら、それは師匠の功績なのだが、弟子は自分が頑張ったから成功したと考えるらしい。

それでも頑張れば成功する構造を与えてくれる師匠がいる限りは、小生意気なだけの弟子ですむ。だが、師匠が死んで弟子が新たな師匠になって喜劇のような悲劇が始まった。

自分ががむしやらに頑張っただけで成功したので、新しい師匠は新しい弟子にもがむしやらに頑張れという。ところが、今度の師匠は距離も方位も道程も教えてくれないので、弟子は頑張る前にそもそもどう頑張ればいいのかを考えざるをえない。しかし、がむしやらに頑張っただけで成功した師匠にすれば、考え込んでいる弟子の有り様は怠けに見えるらしい。これで生産効率が先代の四割程度の落ち込みで済んでいるのはむしろ僥倖だろう。いい加減、自分の誤りを認めてもよさそうなものだが、失敗の責任を問われたくないものだから、『今時の若者はく』を繰り返す。

これでは若手連中がアルリックシルの持ってきた手順書に飛びついたのも無理はない。これを機会に、あの製鉄所の状況が好転してくれば、それにこしたことはない。

「——とボウデイツカ姉さまが言っていました」

「なるほど、さすがに『ボウデイツカ姉さま』だ。実に鋭敏明晰」

アルリックシルは苦笑しつつも相槌を打った。ボウデイツカ殿若いなく、というか、生産効率が四割低下ってく——という数多の思いを飲み込んで、真面目な顔を作る。

「それだけ鋭敏明晰な『ボウデイツカ姉さま』は、君が嘘を続ける事を望んでいるかね？」
プラス少年はどうとう降参した。

「重ね重ね虚言を弄した事をお詫びします」

「よろしい。ついでだから、道中共にしないか？」

意図してからりとした態度を作ると、プラスも素直に答えた。

「はい。賢者様さえよろしければ」

「よかった。君とは話したいと思っていたんだよ」

「ぼ、僕とですか？ ボウデイツカ姉さまとじゃなくて？」

「彼女は文武両道だけど、僕はそうじゃないからね。……その点では君も『こっち側』だ
と思うけど？」

プラスはその言い回しで悟ってくれたようだ。要するに学問一辺倒で武芸はからつきしという点で、アルリックシルとプラスは共通している。そして、こういう型の人間は辺境では珍しい。お互いの話し相手としては貴重なのだ。

「ウルルの賢者様とお話できるなど光栄です」

元気よくプラスは頷いた。隠し事もなくなった上に心中を吐露し、すっきりしたようだ。ボウデイツカは改革派の首謀とすれば、おそらくこのプラスという少年はその参謀候補として目をつけられ、育てられているのだろう。

推測の裏づけが欲しいので、アルリックシルはさっそく尋ねてみる。

「『ボウデイツカ姉さま』はやはり傑物かい？」

「ええ、ボウデイツカ姉さまは凄いです……！」

少年プラス君は目を爛々と輝かせて語った。

「すっごく強くて、頭もよくて、ちょっと乱暴だけど、面倒見もいいから皆から慕われて
いるし……それに綺麗だし……」

「——好きなの？」

「えっ」

彼は顔を赤らめながらも「……はいっ」とはつきり頷いた。

——微笑ましいな。

チーシェイ辺りには理解できないだろう。だが、アルルクシルには彼の抱く感情に覚えがあった。

アルルクシル自身、子供の頃、黒髪の幼馴染に惹かれていた。アーチェンと呼ばれていた彼女は体が弱かった。貧弱なアルルクシルよりもさらにアーチェンは病弱だった。そのためか、黒髪のアーチェンは赤毛のボウディツカのように乱暴ではなかった。だが、その分、アーチェンは知的で傲慢だった。当時はよくわかっていなかったが、同い年のアルルクシルの事など見下しきっていただろう。

——でも、あれが僕の初恋だったんだろうな。

滲み出る覇気が魅力となる少女に、少年は憧れるものだ。違いといえば、ボウディツカのような武威や美貌がアーチェンにはなかったこと、反面、その英知において、アーチェンはボウディツカをもはるかに上回っていたこと……。

——そして、僕がこのプラスのようにもう若くないということか……。

春秋に富む若者を見るのは嬉しい。その一方で既に先が見えている己が惨めになる。

そんなことを考えながら、アルルクシルは少女のような少年を思わず凝視した。

「賢者様っ……！」

とそこに後ろから声をかけたのは、噂のボウディツカその人だった。

途端にプラスの顔がさらに色づく。先程までの会話が聞かれていたかどうかはわからな
いが、純朴そうなプラスにとってはその可能性だけで衝撃だったらしい。元々色白なので、
ほとんど林檎のようだった。

「農地開発についても意見をよこせ——と思って立ち寄ったんだが……」

ボウディツカはいつものように偉そうに、しかし、教えを請いに来たらしい。ところが
「……プラスには手を出すなよ」

と、彼女は意味不明の事を言い、何故かチーシェイも頷いていた。

彼女の案内した先は一面の湿地だった。恐るべき事に見渡す限りの彼方まで延々続いて
いる。生え広がるは水芭蕉、水面に跳ねるは川魚——これぞまさに『妖精の楽園』！
アルルクシルはほとんど恍惚としてしまった。

「僕はあまり風雅を解さないのでが……これは壮観ですね」

「ああ、これを全部埋め立てなきゃならんと思うと気が遠くなる」

「……埋め立て？ 農地開発って干拓事業ということですか？」

「そうだ。大変な作業になるが、これらを尽く農地にすれば莫大な収穫が期待できる」

「……………」

ボウディツカとの間に齟齬があることをアルⅡイクシルは認識した。

都会育ちのアルⅡイクシルにすれば、これはこれで貴重な財産なのだが、田舎育ちのボウディツカにとっては「寄生虫も多いし、とっと潰したいんだよ」で終わってしまうのだ。

「とりあえず、干拓計画書をまとめておけ」

「ええっ、それも僕が？」アルⅡイクシルは戸惑った。「僕の専門じゃありませんよ。いえ、この際言わせてもらいますが、あの製鉄所だって……！」

「持って来た本の山には干拓事業の本だってあるだろう」

「だったら、その本をこの地の専門家に……ああ、そっか、その人たちはアツザフル語が読めないんだ」

「『文明開化』なんて、そんなもんだよ」ボウディツカは凶暴な笑みを浮かべる。「十全な環境が整うのを待っている暇なんざない。教本片手の素人が曖昧な翻訳で失敗を重ねて突き進む。それでいい。それでこそ、先進国に追い付く事ができるのだし、しがらみのなさ故に先進国にも真似できないものができたりするんだ」

アルⅡイクシルは頭痛がしてきた。帝国にいた頃はずっと下っ端で、こんな風にあれもこれもと仕事が舞い込んでくることはなかった。己の存在が急に重視されるようになったのは嬉しい。が、抱えている書類がさらに重くなるかと思うとゾツとする。

「……それにしても、ティルⅡナⅡノグは実に湿潤な気候ですね。水産物も豊富なんじゃないませんか？」

重圧に朦朧としてきたので、アルⅡイクシルは世間話に逃げ出す。

「ああ、漁撈では世界でも最先端を突っ走っていると自負しているぜ」

ボウディツカは自慢げだった。アルⅡイクシルも「ええ、その点については帝国の方が習う立場です」と返す。実際、乾燥地帯であるアツザフル帝国育ちにしてみれば、これだけの降雨量は羨ましいという他ない。

「なあ、雨が多いなら、稲は作れないのか？ 米は旨いぜ」

口を挟んだのは珍しくチーシュイだった。しかし、アルⅡイクシルは首を横に振る。

「無理だよ。ここは冷帯。米を実らせる稲はおそらく熱帯付近が原産。いくら人の手を加えるからといって、冷帯で育てるのは無謀極まりない」

「そうか……」チーシュイは残念そうに首を下げた。

……実のところ、アルⅡイクシルは極東にある《根の国》では冷帯でも稲を育てる試み

がなされていると聞いている。だが、それは成功するとしても、多大な犠牲を払うことになるだろう。ここでそんな博打を打つつもりはなかった(第一『根の国』における米重視、稲偏重の思想はある種の精神病であり、模倣すべきでないと考えていた)。

すると付いて来ていたプラスが尋ねる。

「ねえ、米って、あれ？ 南で育つ穀物で、麦に似ているけれど、麦と違って一粒植えるのと十粒なるっていう——あれ？」

「どうやらプラスは米については書物で読んだだけで、実物を見たことはないらしい。」

「ええ、収穫倍率は一般に十倍を超えます。よければ二十倍。帝国の最新技術を駆使すれば、百倍を超えますよ」

「う、嘘でしょう」

プラスが啞然としたのも無理はない。この頃、北方の麦は『ヒトツブコムギ』が少なくなく、収穫倍率は決して高くない。麦の収穫倍率が十倍になれば、それは奇跡的というよりも神話的な豊作だった。

「じゃ、じゃあ、米は麦よりもずっと美味しくて、しかも、それだけ食っていれば生きていけるっていうのも……」

「そうですね。美味か否かは個人の好みですが、一般に米は麦より遥かに甘いです」

「『甘い』って……？ だって、麦の仲間なんでしょう？」

「それでも、米は『甘い』んです」

これにはボウデイツカも怪訝な顔をしたが、アル・イクシルは米に『甘み』があることを体験している。実際、さして味覚が鋭いわけでないアル・イクシルには当初米の『甘さ』がよくわからなかった。しかし、アーチェンの薦めに従い、良質の米を炊き冷ました後、良質の水をかけて、これを食べると確かに『甘い』のだった。

「ぶっちゃけた話、塩さえかければ、いくらでも食べられます。栄養学的にも、完全食に極めて近いですね。精米を加減する必要はありませんが」

「そ、その上、毎年米は作っても大丈夫だって聞いたんだけど……これは嘘でしょう？ そんな魔法みたいな食べ物あるわけじゃないですよね」

「いえ、事実ですよ。条件次第で二毛作どころか、二期作すら可能になります。水田にするとか、蓮華を植えるとかで、連作障害も回避できます」

「そ、そんなあ……」

プラスは立ち眩みを起こしかけた。

そして、ボウデイツカがその頭をぼんぼんと叩く。

「そんなものが育つ国と、あたしたちは渡り合わなきゃならんということさ」

「……??？」

逆にチーシューイはちんぷんかんぷんらしい。

そして、これが知性の差なのだろう。

——チーシユイには悪いが、ボウデイツカとプラスの方がはるかに賢い。

だからこそ、彼女たちの方が現状をより正確に分析し、危機感を抱くことができる。実際、米を栽培できるか否かで、人口は文字通り桁違いになる。自然と国力に圧倒的な差が生まれるのだ。

「まあ、できることからやってみましょう。基本は牛や羊の牧畜、それに小麦、大麦、燕麦。外貨獲得のための砂糖大根といったところですね。それとこれは内密にですが、異大陸のジャガイモも数種お渡しします」

「ジャガイモを？ いいのか、帝国でもまだ浸透していないのだろうか？」

「法的制約はありませんよ。とはいえ、際どい行為ですので、あまりおっぴらには……」

「ああ、それでもありがたい」ボウデイツカは珍しく素直な感謝の言葉を述べた。「本当にありがたい。あんた十人よりもジャガイモ一株の方がありがたい」

「……そ、そうですか」

彼女の言葉はまったくの正論であったが、しかし、アルⅡイクシルは悲しかった。

悲しくはあったが、しかし、アルⅡイクシルにとってティルⅡナⅡノグの居心地はよかった。前述の親方連中との諍い等もあったが、他の多くとはうまくやっていった。例外はあっても、その辺りはボウデイツカが調整してくれたのだ。

都会で本ばかり読んできたアルⅡイクシルと、辺境で獣を追いかけてばかりのティルⅡナⅡノグの民が奇妙に分かり合えた理由は良くわからない。言語の問題もあり、文化の素養もない『野蛮人』に、行政機構の意義と利点を根気強く説明した事が一因かもしれない。『物分りのいい』帝国人と違い、微に入り細を穿った講義が常に必要とされたが、一度、覚えれば、その理解は実に深く根付いていく。

——愚直さを上回る英知などないのかもしれない。

時々、彼らが放つ素朴な質問に絶句し、一人考え込む羽目になったアルⅡイクシルはそんな尊敬の念すら抱くようになった。それはいつも誠実に答えを導き出そうと苦心を続けたアルⅡイクシルに対し、ティルⅡナⅡノグの民が抱いたものと同じだった。

実際、数ヶ月という短期間でありながら、開発改革の成果は徐々に現れ出す。

同時にアルⅡイクシルはこの島に骨を埋めたいと考え始めた。

——どうせ帝国に戻ったところで、待っている未来などたかが知れている。それよりはここに残り、この島のために尽くす方がいい。

無論、この島の人間が『賢者様』『賢者様』と自分を慕ってくれるのも今だけだ。

彼らはこのテイル・ナ・ノグ島の停滞を打破し、革新に貢献する存在を求めているだけだ。だから、その指針たる大陸先進国の知識や技術をありがたがる。それらをこの境界まで運んでくれる人間なら、彼らは誰にでも教えを乞う。そして、三流でも探求士ゆえに、その役割を果たせるアル・イクシルを立ててくれるのだ。

間違ってもアル・イクシル個人を評価しているわけではない。

だから、知識や技術を運び終えたアル・イクシルに価値はないだろう。

そもそも、アル・イクシル自身、特別なことをしているわけではない。帝国では既に通例となっているやり方に従っているに過ぎない。製鉄所で作った手順書とて、苦い思い出の、しかし、確かに存在したその美点を抽出しただけだ。そんな帝国の常識も、この辺境では眼を見張る改革であり（しかも帝国で、既に手法が確立されているから）、多大な成果を齎せる。

それだけのことだ。別にアル・イクシルでなくともできることだ。それこそウルルにいる者ならば、アル・イクシルよりもずっと上手くやるだろう。

例えば、同じ鉄鋼業でも前述の例とは異なり、進取の気概に富んだ製鉄所もある。

その製鉄所では、一日目には『鉄史要諦』を教本にした講義を夢中で聞いてくれ、二日目には『鉄史要諦』の翻訳を必死にせがまれ、三日目には『賢者様もお忙しいでしょうから、『鉄史要諦』だけ、置いていって下さい』とまで言われた。

——正しい。彼らの姿勢は全く正しい。

その夜、やけに苦い蒸留酒に口にしながら、アル・イクシルは思った。

おそらく十年も経てば、皆が彼らと同じになるだろう。

——だが、それでもここには前進がある。昨日よりもよい明日がある。

そして、それは帝国では既に味わえなくなったものだ。

——なに、ボウ・ドイツカなら、僕が役立たずになっても食い扶持ぐらいは与えてくれる。あるいは貿易商になるのもいいかもしれない。儲けもそれなりに期待できそうだし、元手は父さんに頼めば、貸してもらえらるだろう。

が、ここでアル・イクシルは気付かねばならなかったのだろう。

探求士^{ウラマ}なら誰でも出来ることをやっているアル・イクシルがちやほやされる。それはこれまでこの島にろくに人材が供給されていないことを意味する。つまり、帝国はこの地方を本気で開発する意思などないのだ——と。

もし、帝国がこの地方の開発を本気で進める気であったのなら、とつくの昔に優秀な人材が豊富に供給されているはずだ。そして、彼らの手によって、アル・イクシルが担っている仕事は既に完了しているだろう。アル・イクシルがやるよりも迅速に、確実に、より洗練された形で。

有り体に言って、アル・イクシルにこんな大任が回ってくるはずがない。

しかし、現実にはアルllイクシルが首魁、ボウディッカが後見という形で開発は進められている。

繰り言になるが、それは帝国にこの地方を本気で開発する意思などない証左なのだ。では、そんなところに派遣されたアルllイクシルに期待されている役割とは？
無能菲才の極みと万人が認めるアルllイクシルに期待されている役割とは？
捨て石以外にありえない——と理解したのはしばらく後のことになる。

アルllイクシルがこの島に辿り着いてから、わずかに半年後——。

アツザフル帝国軍五万がティルllナllノーグに上陸した。